

## 【特集 自然派化粧品を開発するには】 〈インタビュー〉 ビタミンC60バイオリサーチ 林源太郎社長／「植物由来化」でSDGsの問い合わせ増加

2022年2月24日版 8面 No.03

ビタミンC60バイオリサーチ（本社東京都、林源太郎社長、（電）03—3517—3251）は、独自の化粧品素材「フラワーレン」の全6素材について、21年2月までに「植物由来化」を完了した。以来、「SDGs」を求める化粧品企業からの問い合わせが増えているという。同社では、素材の植物由来化にとどまらず、さまざまな側面からSDGsの考え方に合致した取り組みを推進しているという＝一覧表参照。同社の林社長に話を聞いた。

—昨年、フラワーレン6素材の植物由来化を完了したということだが。

林 21年2月までに、水溶性フラワーレン素材「ラジカルスポンジ（RS）」をはじめとした、フラワーレン全6素材について植物由来化を完了した。植物由来化した6素材のうち、「リポフラワーレンN」など3素材については、ISO16128に基づく「自然由来指数」が、理論上の最高値である1（100%）となった。以前からフラワーレンは、エビデンス豊富で高機能な化粧品素材として知られていたが、「ナチュラル」という新しい切り口が加わった形だ。

植物由来化に当たっては、単に原材料を植物に変えるだけでなく、SDGsの観点から、製法の見直しを行った。その結果、「サステイナブルな化粧品素材」としても注目されるようになり、SDGsへの対応を求める化粧品企業から、多くの問い合わせをいただけるようになった。

—製法について、具体的にどのような見直しを行ったのか。

林 例えば、出発原料の木材として、宮崎県産の天然の杉を採用した。持続可能な森林管理の国際的な認証制度である「FSC認証」を受けた森林の杉のみを使うようにした。少ない木材から無駄なく効率的にフラワーレンを製造するために行う、木材のペレット加工についても、合法的な木材の調達・加工・流通を促進する「クリーンウッド法」で認定された企業で行っている。こうした取り組みはSDGsの「陸の豊かさを守ろう」という開発目標に合致している。

また、フラワーレンを製造するためには、一度純粋な炭素の塊を製造する必要があり、原料となる木材を、数週間約3000度で加熱し続けなければならない。この工程の環境負荷についても極力減らすため、当社では、クリーンエネルギーといわれる水力発電で得た電力を用いている。こうした取り組みは「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」という開発目標に沿ったものだ。

さらに、植物由来化に合わせ、フラワーレン素材を充填する容器として、アルミパウチを採用した。これにより、従来の容器に比べ、使用後の廃棄物の体積・重さを8～9割低下させることができたという。「つくる責任 つかう責任」という開発目標が求める、廃棄物の削減に貢献できるようになった。

「気候変動に具体的な対策を」という開発目標に則り、使用原料・輸送方法の見直しによるCO2の排出削減にも取り組んでいる。

—フラーレンの植物由来化にとどまらず、会社全体としてもSDGsを志向した取り組みを行っているということだが。

林 SDGsの観点から、さまざまな取り組みを行っている。以前から行ってきた取り組みが、SDGsの求めるところと合致していたというケースも少なからずある。

例えば、当社では、女性が働きやすい環境づくりを推進しており、現在の男女比は1対2で女性の方が多い。こうした点は「ジェンダー平等を実現しよう」という開発目標に合致する。産休後も復帰しやすい環境づくりを行っている。これまでに産休に入った社員の全員が職場復帰しており、産休後の復帰率は100%となっている。こうした点は「働きがいも経済成長も」に合致すると考えている。

また、水溶性植物由来フラーレン「ラジカルスポンジ」については、ハラル認証も取得している。多様な方々に原料を使っただけのようにすることは、「人や国の不平等をなくそう」という開発目標の求めるところだと考えている。

—今後について聞きたい。

林 SDGsの開発目標「パートナーシップで目標を達成しよう」の理念に則り、SDGsを重視するパートナー企業と手を携えながら、共同で製品開発を行っていきたいと考えている。